NEWS CIT
ニュースシーアイティ
2023 10.15

千葉工業大学・入試広報部
〒275-0016　千葉県習志野市津田沼2丁目17番1号
TEL 047(478)0222　FAX 047(478)3344
https://www.it-chiba.ac.jp/

毎月1回（8月を除く）15日発行

保護者と教職員 情報交換

PPA地区懇談会 開く

PPAの地区懇談会が9月2日から土・日を中心に計5日間、全国40会場で開催され、無事終了した。地区会場には計413人（学生数321人）の保護者が出席し、どの会場も盛況だった。

全国40会場で 進路や生活、面談も

㊤ 会場を埋め尽くした保護者らにあいさつする瀬戸熊修理事長
㊦ 各教室で教員らと個別に懇談する保護者たち

地区懇談会は、本学教職員が全国各地に出向き、日ごろ顔を合わせる機会がない保護者と懇談するのが目的で、大学生活の様子や子息の成績などを直接、報告している。各会場には同窓会会員らも出席するので、地元の先輩と接点を作り、該当地区の就職状況を知る機会にもなる。地元企業へUターン就職を希望している人々の参考になり、保護者からも「千葉まで行かず地方で相談できるのはありがたい」との声が寄せられた。

最終日の9月24日は津田沼キャンパスで開催。会場の2号館3階大教室に518人（学生数376人）の保護者が集まり、大学の現況などの報告を受けた。この後、就職・進路支援部の小堤幹太次長が「キャリア教育&保護者のサポートについて」と題して講演した。

小堤次長は、本学がキャリア教育を体系的に実施していることや、進路選択に向け早期から取り組んでいること、学生1人1人が描いたキャリアデザインを実現するため教職員が連携し合ってサポートしていることなどを説明した。加えて現在の就職状況や外部の就職支援サービス、企業の実際の採用現場などの資料を提示。保護者の学生へのサポートの仕方についてアドバイスすると、参加者たちは真剣なまなざしで聞き入っていた。

講演終了後は、6、7号館を中心に各学科教員が待機し、個別面談方式で、単位取得状況や成績、進学、就職、学生生活などについて相談を受けた。

保護者たちからは「多くの情報を聞くことができた」「理事長の話が聞け、就職サポートがしっかりしていると分かった」「個別面談で先生が親身になって話を聞いてくれ、安心した」「保護者がたくさん来て関心の高さを感じた」「学生想いの大学だと再認識した」「先生と話す機会が用意され、大学を身近に感じることができた」などの好意的な感想が寄せられた。

ニュースガイド

2面　ChatGPTでアプリ・井野さん關さん／PM国際資格44人合格／角田教授が昭島市CIO補佐官に／秋季学位記授与・入学式／チバニー新ポーズ
3面　PERCが夏期講座／荒井所長隕石語る／ロボ研究室ツアー／千葉市科学館でロボ展示／夏期海外研修が復活
4面　サイエンスショー／八馬教授の著書ドラマ化／津田沼6号館改修完了／新任紹介

藤田医科大学と本学、連携協定

本学と藤田医科大学（愛知県豊明市＝湯澤由紀夫学長、在籍者数約2800人）は9月20日、包括的な協力関係を築いて相互に発展し、学術及び産業の進展と人材の育成を目指そうと、「包括的連携協定」を締結した。

締結式は藤田医大の1号館会議室で行われ、湯澤学長＝**写真右**＝と本学の伊藤穰一学長＝**同左**＝がそれぞれ協定書に署名した。

藤田医科大（略称・藤医大）は1964（昭和39）年設立。超低侵襲標的化診断治療などに取り組み、THE世界大学ランキングの私立大上位に登場。名古屋市や三重県津市に4つの教育病院を持つ。湯澤学長は仮想空間上での連携を構築するメタバース推進協議会で医療福祉関係を代表する理事を務めている。

今回の包括的連携協定で、AI技術やブロックチェーン技術を応用した医学、情報学、環境学等の研究分野における共同研究など、大学間の相互交流を進めていく予定。

米NYのマウントサイナイ医大とも

7月に本学は、米国マウントサイナイ・アイカーン医科大学（Dennis S. Charney学長、学生約1200人、教員約7千人、研修医約2500人、ニューヨーク市に本部）と包括的な大学間交流協定を締結した。

同大は1963年創立。ニューヨーク市中心部にあり生物医学の教育・研究、患者ケアの国際的リーダーとして8つのキャンパス・病院を展開。医学グループマウントサイナイ・ヘルスシステムに属する医科系大学で、本学とはAIを活用した臨床試験の効率化や医療技術の発展に関する共同研究が期待される。

コロナ禍中の対策

本学取り組みが成果

2020年に新型コロナウイルス感染症が拡大し、全国の大学がロックアウトを続ける中、本学はどの大学よりも早く学生たちにキャンパスを開放し、多様な人数分散を工夫しながら実験・実習・演習を手始めに対面授業を実施してきた。

これは大学の授業開講の責任を果たすためだけではなく、貴重な大学生活で学生たちが仲間と、ともに研鑽し試行錯誤して、授業以外でもかけがえのない学びの場を実現しようと教職協働で取り組んだ結果だった。

本学教学センターがまとめた結果、その成果が多くの場面で現れているので一部を紹介する。

① 年間退学者数では、コロナ禍の影響で全国的に心身の不調を理由に退学者数が増加する中、本学は心身の不調を理由とする退学者も減少し、4～9月の退学者数が昨年度より31人減少、年間退学者数は昨年度を大幅に下回る予測となった。これは早期の対面授業の復活やクラブ活動の復活、欠席者への電話連絡や窓口相談に加え今年度から開設した「学生サポートセンター（通称・がくさぽ）」＝在学の先輩たちが相談に対応＝の効果があったとみられている。

② 今年度新入生向け調査で、履修単位に対しほぼ全ての単位を取得した学生の割合が前期時点で86・5％となり、過去3年比で4・7％も上昇した。近年の入学試験倍率の上昇に伴い、入学する学生たちの学修意欲が高まっている証であり、単位取得への高い意識が入学時から保たれ、教員たちも分かりやすい授業を提供しようと改善努力した結果といえる。

本学は建学の精神「世界文化に技術で貢献する」のもと、教職協働による学生の育成に取り組んでおり成果を上げている。今後もアフターコロナの社会変革を技術で支え、より豊かな生活の実現へ貢献できるよう、あらゆる視点から学生たちの成長を後押しする取り組みを続けたい、としている。

ChatGPTを用いてアプリ開発

井野さん、關さん ▼ PM秋季大会で奨励賞

プロジェクトマネジメント（PM）学会の2023年度秋季研究発表大会（8月31日～9月1日、山口県宇部市の山口大工学部・常盤キャンパスで開催）で、井野駿也さん＝写真右、關咲良（せきさくら）さん＝同左（ともにPM学科3年、小笠原秀人研究室）の2人が提案した「ChatGPTを用いたwebアプリケーションの開発」が学生研究発表賞奨励賞を受賞した。

人間並みに問いに答える生成AI「ChatGPT」について。プロジェクトマネジメント演習（PM演習）でプログラムを作成する際、発生した問題をChatGPTを使って解決した。このときに解決した問題、逆にChatGPTによって起きた問題をまとめ、Webアプリケーションを開発する上でのChatGPTの活用方法を提案した。

ChatGPTの活用でプロジェクトの創造性と効率が向上した半面、回答の精度向上や品質管理が課題となった。技術と倫理をバランスよく考える重要性を学んだので今後に生かしたいという。

受賞に關さんは「感謝の気持ちでいっぱいです。協力者とチームメンバーの支えがあって成功したもので感謝しています。ChatGPTの潜在力や課題を学んだので、より正確で安全な利用方法を研究したい」。

井野さんは「初めての学会発表で、賞にこだわらず楽しく発表を、と考えていたので（受賞は）大変うれしいです。これを励みにPMの研究につなげ、ChatGPTの進化に対応していきたい」と語った。

昭島市のCIO補佐官に

角田教授が就任 ▼ 電子化へ助言役

社会システム科学部の角田仁教授＝写真＝が7月1日付で東京都昭島市のCIO補佐官に就任された。

CIO（Chief Information Officer）補佐官は電子政府構築計画を支援する中で生まれた役で、情報システム統括部門に助言し、最適な組織を生み出す設計を担う。

昭島市は副市長がCIOを務めているが、角田教授は副市長を助け、自治体が保有する情報システムに関する支援・助言や地域のDX・デジタル化を推進する。

角田教授はデジタル人材育成学会の会長で、「EBPM（Evidence Based Policy Making）＝「証拠〈主にデータ分析〉による政策立案）にもトライしたい」と述べ、学会と連携した市職員らの人材育成も期待されている。

チバニーに おじぎポーズ

成田さんの案採用 ▼ 誕生10年募集

本学公式キャラクター「チバニー」が受験生応援大使として2013年4月1日に誕生して10年目。在学生に募集していた新ポーズが決まった。

チバニーにもっと愛着を、と入試広報部が募集。数ある応募の中から成田凜太郎さん（先端材料工学科2年＝写真）のデザイン案「おじぎチバニー」＝上のポーズ＝が選ばれた。

10月3日、チバニーが出迎えて授賞式があり、チバニー生みの親・坂崎千春さん（イラストレーター、本学の坂崎春樹名誉教授＝元・工業経営学科＝のご息女）が描いた新ポーズとサイン入り色紙が成田さんに贈られた。

色紙のチバニーを見て成田さんは「かわいいですね」と笑顔。「おもしろそうなことやってるな！と思い、普段からイラストを描くのが好きだったこともあり応募しました。まさか選ばれるとは（笑）。うれしいです」と話していた。

PM国際資格に44人合格

米国プロジェクトマネジメント協会（PMI）が認定するプロジェクトマネジメントの国際資格CAPM®（Certified Associate in Project Management）に、本学の44人が合格した。

CAPM®はビジネスに必要な「目標設定→計画→実行・修正」のプロジェクトマネジメント（PM）能力をテスト。コンピューターで受験し3時間で150問に回答する。

受験資格として23時間の公式研修を受講することが求められており、本学では毎年7～9月にPPA特別教養講座の支援のもと、学内で丸4日の短期集中研修を開講している。講師は本学PM学科1期生でデザイン科学科の西田絢子准教授が、講座事務局はPM学科の田隈広紀准教授が務めている。

22年度研修分の合格者第1号の高橋郁成さん（デザイン科学専攻）は「マネジメントの知識は、想像以上にデザイン科学と関連・類似していると感じました。修論やその後の仕事に対する視野が拡がったことを実感しています」と語った。

届いた認定証を掲げる合格者たち

■ 合格者（敬称略・所属は22年度のもの）

マネジメント工学専攻

・PM学科：三科隆也、貫田智博、赤津榛花、上石源、荒木敬介、宇佐美真幸、太田良、岡島幸輝、加藤大聖、鎌形友貴、北澤準也、栗原瑞生、小林俊介、柵山峻輝、佐々木聡真、清水颯太、田中創、陳志恒、中川大海、橋本匠矢、平形和也、平川日向、藤井倖太郎、藤澤歩、丸山実優、森陽兵、山内珠々菜、山本翔太、荒川義丈、齋藤聖也

デザイン科学専攻・デザイン科学科：芦沢健、伊藤尚子、高橋郁成、荒牧響、井内惇、尾形桃香、坂本健、鈴木勇輝、新葉星来、相樂恵里、鎌田梨那、川又千恵、塚越楓、二本松梨紗

26人 新スタート

▼ 秋季学位記授与・入学式

令和5年度の秋季学位記授与式と入学式が9月12日、津田沼校舎1号館20階で行われ、卒業生24人、新入学生2人の計26人が新スタートを切った＝写真。

卒業生は学部21人、大学院修士課程2人、博士課程1人で、午前10時から学位記授与式が行われた。

学部卒業生代表の情報工学科・小野美琳（みりん）さん、博士前期課程及び修士課程修了生代表の知能メディア工学専攻・小林蓮（れん）さん、博士後期課程学位取得者のマネジメント工学専攻・遠藤晃男（てるお）さんらが緊張した面持ちで佐波孝彦副学長から学位記を受け取り、所属研究室の教員らが見守った。

晴れて卒業を迎えた学生らは、伊藤穣一学長から「皆さんが大学での学びを通じて得たものは、単なる知識や技能だけではありません。挑戦して失敗する、そしてそれを乗り越えていく、そうした経験を通じて、皆さんは、より強くなり、より柔軟に対応する力を獲得しました。未来は予測できないかもしれません。それでも私は、皆さんが未来を切り開く力を持っていることを信じています。皆さんのこれからの人生に、新しい発見と成功が数多くあることを心より願っております。千葉工業大学の誇りとして、世界に羽ばたいてください。本日は、おめでとうございます。」（当日、佐波孝彦副学長が代読）と、祝福の言葉を贈った。

午後2時からは秋季入学式が行われた。入学生は大学院修士課程の情報通信システム工学専攻に1人、博士後期課程の工学専攻に1人。新入生たちは瀬戸熊修理事長、式典に参加した教員らに「入学おめでとう」と言葉をかけられ、新たな一歩を踏み出した。

▼夏休みに開く科学講座

DESTINY+が目指すもの

PERC、JAXAが小中高生に

本学と宇宙航空研究開発機構（JAXA）が共同で計画を進める小惑星探査機「DESTINY+（デスティニー・プラス）」が2024年度に打ち上げられるのを前に、小中高生を対象にした夏期公開講座「デスティニー・プラスがめざす小惑星の謎」が7月30日、東京スカイツリータウンキャンパスで開かれた。夏休み中の家族ら約80人がトークやクイズを楽しんだ。

本学からは惑星探査研究センター（PERC）の荒井朋子所長や小林正規副所長、石橋高上席研究員、秋田谷洋上席研究員が登壇。JAXAの高島健プロジェクトマネジャーもサプライズで参加し、トークライブ形式で進められた＝写真。

PERCの講師陣はデスティニー・プラスと、その目標天体である小惑星「フェートン」を分かりやすく紹介。小惑星の特徴や搭載される機器と探査方法などを計14問のクイズ形式で解説した。

途中で登場した「イプシロンロケット」の模型や、フェートンのダストを地球に持ち帰ることなくその場で観測する装置「ダストアナライザ」の実物大モデルに子供たちは興味津々で、搭載カメラの駆動鏡の試験段階の動画なども特別に紹介された。質問コーナーでは「フェートンのCGに見える白く映っている部分は何か？」といった声が寄せられ、研究員たちの解説に聞き入っていた。

荒井所長は「デスティニー・プラスのことをいろいろ知っていただいたと思う。ぜひ夏休み明けに友達にも教えてあげてください」と呼びかけ、JAXAの高島プロジェクトマネジャーは「デスティニー・プラスは挑戦的なミッション。5年後、10年後、15年後に皆さんがもしかしたら関わるかもしれないので、長い目で応援いただけたらと思っている」と話していた。

最後に、デスティニー・プラスと同じく24年度打ち上げ予定で、PERCが大きく関わっているJAXAの火星衛星探査計画「MMX」も紹介され、PERCが開発を主導する2つの観測機器などを説明。観測装置の開発についてのクイズでは、探査機や人工衛星をロケットから切り離す時の衝撃に耐えられることを調べる試験方法に「おじさんがハンマーでたたく」方法もあることを明らかにすると、参加者は驚きの声を上げていた。

今回、文化会動画制作部がクイズのイラスト制作に協力し、イベントの成功に貢献した。

本物の隕石に触った

荒井所長が解説 ▼太陽系を学ぶ

小中高生向けの夏期公開講座「本物の星のカケラを見て触ってみよう！」が8月6日、東京スカイツリータウンキャンパスで開かれた。先着約80人の親子が参加し、隕石の種類や太陽系の歴史などについて楽しみながら学んだ。

惑星探査研究センター（PERC）の荒井朋子所長は「今日のテーマは『石』。石には、石のできた方やできた時期の情報が刻まれている。地球以外の天体のカケラである隕石は、太陽系の天体の歴史を調べるための貴重な手がかり。地球以外の天体のカケラを見て触ってもらいたい」と語りかけ、岩石や鉱物の種類を説明。化学組成などを分析することで星の成り立ちが浮かび上がると解説し、南極や砂漠で隕石を発見してきた模様を紹介すると、参加者らは熱心に耳を傾けていた。

特に興味が集中したのは本物の隕石に触れるコーナー。ビニール手袋をつけた参加者は各種の隕石に触れたり比べたり＝写真上、金属の鉄を含む隕石に磁石が付くことを確認。「黒い部分や白い部分は何？」「どうして隕石はくっつくの？」などと質問を重ねていた。

中高生 ロボ研究室巡り

▼fuRo、未ロボ学科が協力

「ロボットと暮らす未来社会&ロボ研究室ツアー」が8月9日、津田沼キャンパスで開かれた。科学に関心を持つ中高生のために千葉市教育委員会が未来の科学者育成プログラムに従って学習機会を提供し、本学が協力している。

第1部は未来ロボット技術研究センター（fuRo）の戸田健吾上席研究員による講演で、戸田研究員はfuRoが開発したロボットを紹介。次世代の乗り物や災害の時に役立つロボットなどを、生徒たちに分かりやすく話し、「ロボット技術がどんなに進歩しても、どう使うかを決めるのは人間です」と語った。

第2部は未来ロボティクス学科の研究室ツアー。菊池耕生研究室や太田祐介研究室、上田隆一研究室＝写真上＝の学生らが、企業と連携開発したロボットや研究室での研究成果を説明し、一部操縦体験も行われた。

生徒たちは「自分が思っていたよりもロボットが生活の中で役立っていることを知った」「ロボット技術の進歩の速さに驚いた」「ロボットが人生を豊かにするために作られているのだと学べた」。また、「研究室ツアーが面白かった」「珍しい研究が多く、説明も分かりやすかった」「ロボットに興味が湧いた」などと話していた。

災害対応ロボ展示し実演

fuRoと学生 ▼千葉市科学館で

千葉市科学館（千葉市中央区）が開いた夏の特別展「スタンバイ！防災！もしものときのわたしたち」（8月18～20日）で、未来ロボット技術研究センター（fuRo）に依頼があり、保坂謙史郎・客員研究員と未来ロボティクス学科の学生6人が出向いてレスキューロボットを展示。開発ロボット群を解説し、デモンストレーションや操縦体験教室を開いた＝写真。

展示したのはfuRo開発の災害対応ロボ「Quince（クインス）」で、東日本大震災で福島第1原発内部の探査に使われたことなどを説明した。

実演では「櫻弐號（さくらにごう）」を使い、障害物を乗り越える様子を見せた。操縦体験は人気で、3日間で親子620人もの参加があった。

復活！夏期海外研修 ▼28人参加

米、ベトナム、モンゴルで

新型コロナウイルスのパンデミック（世界的大流行）で本学の夏期海外研修プログラムは中止を余儀なくされてきたが、今年、規制緩和が進んだことから、大学は4年ぶりにプログラムを再開。米カリフォルニア大での英語研修に15人、ベトナム海外インターンシップに9人、今年から開始したモンゴルサマースクールインターンシップにも4人と、計28人の学生が参加した。

カリフォルニア大での英語研修は、同大アーバイン校でネイティブ英語講座を受け、現地学生と交流しホームステイを体験した。

カリフォルニア英語研修参加者とホストファミリー

ベトナムでFPT大の学生たちとダナン市内の散策を楽しむ

モンゴルサマースクールインターンシップでモンゴル人高校生に「射る」という日本語を教えている様子

ベトナム海外インターンシップでは、FPT大学でビジネス英語を研修後、同国のIT企業やリゾートホテルで実務を経験した。学生たちはこの経験で英語力の向上と同時に異文化理解を深めることができ、外国の友人もできたと笑顔で語った。

モンゴル小中高一貫校でのサマースクールインターンシップには、他大学の学生を含めて参加希望が殺到した。結局8人が選ばれたが、その半数の4人が本学学生。参加者たちはモンゴルの高校生に日本語や日本文化を教える体験に挑んだ。プログラム初日にはサプライズで瀬戸熊修理事長が現地に現れ、参加学生らを激励。学生たちは突然の理事長訪問に驚きながらも喜び合って、モンゴルでの体験を満喫していた。

燃焼実験に親子ら100人

半沢教授ら担当 ▼サイエンスショー

本学教育センターが担当する夏休みの小学生向け「サイエンスショー」が7月22日（土）、千葉県立現代産業科学館（市川市鬼高）で開かれた。例年にない猛暑だったが来場者は多く、午後1時、2時45分開始の2回の実験に、小学生や父母たちが各50人ほど参加。見慣れない実験の様子に歓声が上がった。

実験してみせたのは教育センターの半沢洋子教授（化学＝写真前方スクリーン横）と非常勤教員の金子毅さん＝その右。まずは酸化現象など自然の不思議をイラストで解説し、さまざまなものを燃やしてみせた。

鉄も燃えるか……。ヤスリで削った鉄粉やマグネシウムリボンにバーナーを近づけると火花を発し、モノによって発色や燃え方に違いがあることに驚きの声が上がった。

最後の見せ場はスチールウールをツリーに見立てた体験コーナー。子供たちが注意深くツリーに点火し、パチパチと燃えるツリーに親子から「きれい」「すごい」「不思議！」と感想が寄せられ、実験を締めくくった。

木目調の新空間　▶ 津田沼6号館 改修完了

講義室は床材も木目張り

光と木の柱が迎える1階ホール

津田沼キャンパスのツインタワーに挟まれた6号館（5階建て講義棟）は、経年劣化などのため8月から夏期休業期間を利用して改修工事が行われていたが、このたび工事が完了した。1階を中心にホールと教室内部が明るい空間に生まれ変わった。

6号館は1995年12月、当時キャンパス内に分散していた講義室を集約し、3650人収容可能な講義棟として、工大らしい重量感あるたたずまいで誕生。しかし28年が経って劣化も進み、改修を決定した。

コンクリート素地にみられがちな薄暗く無機質なイメージを払拭し、明るく心地よい就学環境を造ることに焦点をあてて工事が進んだ。

取り入れたのが木目調。1階ホール吹き抜けに木の大柱を林立させ、つなぐ壁には趣のある「ゆず肌仕上げ」を施し光が包む柔らかい大空間を演出した。講義室の壁・柱・梁には異なる色味の木目シートで濃淡のアクセントを付けた。また、一部の講義室には木目調の床材を張り、温かみのある明るい雰囲気に変えた。

新任紹介

（敬称略）

水本（みずもと） 旭洋（てるひろ） 准教授
（情報ネットワーク学科）

教育と研究の両面から、学生に1つでも多くのことを学んでもらえるように、環境を整えていこうと思います。

専門はサイバーフィジカルシステム。趣味はボードゲーム、キャンプ。

Kucukarslan Nurcan（キュチュクアルスラン ヌルジャン） 研究員
（地球学研究センター）

遺跡から発掘された金属や土器などを地球化学的手法で分析し、これらが作られた時代の技術を明らかにすることが研究テーマです。地球学研究センターの一員として、中央アナトリアの歴史をより深く正確に解明していけると信じています。

松原（まつばら） 康太（こうた） 研究員
（変革センター）

web3、DAOの社会へのインパクトなどが専門分野です。自身の研究もしっかり行いつつ、大学の運営面でも貢献できるように頑張っていきたいと思います。

山口（やまぐち） 聖矢（せいや）
（総務部付　事務職員）

職員同士でコミュニケーションを密にとり、活気あふれる職場です。自身のすべき役割を理解し行動する人材になるよう精進します。

趣味は釣り、サウナ。

同窓会

私はまだ現役のサラリーマンですが、最近仕事の効率化で非常に便利なツールが出て来ました。そうです「チャットGPT」です。ご存じの通り、この技術により世界のすべての産業で大変革が起こると言われています。チャットGPTは、AIでありながら人間のような文章を作成することができ予測まで出来る人工知能ツールです。対話型で質問するとなんでも答えてくれるのです。それもかなり高い精度で回答してくれるのです。ものすごーく便利です。

これがあればもう残業しなくてもスイスイ仕事が片付いていくーと思いきや、そんな簡単ではないですね。間違った情報があったり、正確ではなかったりとまだまだのところもあります。残念ながら忙しいのは変わりません。一方近い将来、あなたのポジションはAIさんが担務しますなんて時代が来る可能性もありますね。恐ろしい時代です。

さて、同窓会ではデジタル技術を活用して同窓会活動を活性化する取り組みを行っています。皆様からの同窓会へのデジタル化へのご要望や期待すること等いただけると幸いです。

同窓会デジタル化推進特命理事　平岡　和巳

四季雑感

いつまで続くのかとうんざりしていた暑さも和らいだ10月初旬、習志野市民剣道大会へ出場しました。5人1チームの団体戦、私以外の4人は本学の現役部員、難しい局面は若者に任せて……と、楽な気持ちで臨んだのが良かったのか戦績は上々。チームは2位となりました。目に見える結果を残すことが出来てほっとしています。

市民大会を皮切りに出身大学のOBとして出場する大会や社会人の大会などが控えています。出場する大会によって所属も変わり、チームを組むメンバーも変わりますが、絶対に変わらないものがあります。そう、「反省会」です。

試合の反省はほどほどに、思い出話を肴に時間を気にせず夜更けまで。早々に敗退すると昼過ぎから、終わりは変わらず夜更けまで。中心は50－60代の先輩方、盛り上がってくると割り箸を竹刀に見立て、実演を始める先輩の姿はどのチームでも変わりません。

良い結果を残し、楽しい反省会にするために、秋の訪れとともに誘惑してくる食欲は我慢して、稽古に励みたいと思います。

大学改革推進室　渡邉　新

編集だより

猛暑日が続くなど全国で記録的な暑さとなった今年の夏。気象庁が過去126年で最も暑い夏だったと統計をまとめた。

暑さはもとより、いつまで引きずれば気が済むの？と、とにかく猛暑期間が長かった気がする。

暑いかと思えば急に冷え込んだりの繰り返し、やっと秋めいてきた10月半ば、私事で恐縮だが「あれ？もしかして風邪っぽい？」とちょっとダウン。私にしては珍しく風邪を引いてしまった。

普段、元気だけが取り柄の私は、ほんの少しのやせ我慢と気合いで、家族全員がインフルにかかろうが、熱を出そうが、ぴんぴんしていたものだが、今回どうしたものか……。「不甲斐ない」の一言に尽きる。

しかし、例年12月から流行するインフルエンザがすでに注意報レベルとなっている。今後、冬にかけてさらに流行する可能性もあることから、予防は必須だろう。

本学では、インフルエンザワクチンの予防接種について案内を出したばかり。ポータルサイトを今一度ご確認下さい。

入試広報部　大橋　慶子

▼日常の絶景めぐる旅

八馬教授の著書 ドラマ化

デザイン科学科・八馬智教授＝写真上＝の著書「日常の絶景 知ってる街の、知らない見方」＝同下＝がテレビ東京でドラマ化された。9月19日に放映が始まり、3週にわたって放送された。

同書は八馬教授が「絶景は私たちの日常に隠れている」をコンセプトに、室外機やダクト、通信鉄塔、消波ブロック、ダムなど、都市を形作る15個を写真と共に解説。

2021年12月に学芸出版社から出版された。

ドラマでは、日常の絶景探しが趣味の会社員（元乃木坂46・伊藤万理華さん）が同僚（電線愛好家を自称する俳優・石山蓮華さん）と2人でお台場のガントリークレーン、勝浦の砂防や消波ブロック、埼玉県の滝沢ダムなどを巡って、その風景を愛（め）でる。八馬教授は「まさかまさかのドラマ化？　都市鑑賞がテレビドラマになるなんて」と、驚いたという。

「自身がとらえる『日常の絶景』のコンセプトを、他者がどう表現するのかがとても楽しみでした。第1話を見て、プロが撮った映像はとても美しく、素晴らしい仕上がり」と話していた。

11月17日（金）大学祭準備日（休講）・18日（土）～20日（月）大学祭（休講）・21日（火）大学祭片付日（休講）、19日推薦型選抜入学試験